

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00650

研究課題名(和文) 資料横断的な漢字音・漢語音データベース構築・公開に向けた基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research for construction and release of Sino-Japanese and Sino-Japanese word database across pre-modern Japanese works

研究代表者

加藤 大鶴 (KATO, Daikaku)

跡見学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：20318728

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」(30文献、延べ字数で86,875例)を公開した。このデータベースの特色は、古代から近現代までを貫く時代的通覧性、位相的多様性(漢文直読・訓読資料、和化漢文、和文資料)、漢字音と漢語音を相互に対照可能とする点にある。データの利用に際し、各文献の特徴と入力に関する個別的な情報等をまとめた書誌データファイルも合わせて公開した。このファイルには当該のデータが含まれる文献資料の漢字音を扱う上で知っておくべき情報をまとめ、関連する参考文献も掲げている。またこのデータベースを用いた新たな漢字音研究の可能性についても学会等で報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の日本語に3割程度含まれる漢語、およびその構成要素となる漢字音の歴史は概ね明らかにされている。近年、日本語の研究は新しいアプローチとしてコーパスなどデータ化された大規模な資料に基づいて、これまでにない発見が重ねられつつある。本研究は漢字音・漢語音についても大規模なデータベースを作成し、さらには異なる使用者層の言葉を比較することで、新しい研究領域を創出しようとする。

研究成果の概要(英文)：The "Comprehensive Historical Database of Sino-Japanese" (consisting of 30 sources and a total of 86,875 examples) has been publicly released. This database is characterized by (1) its chronological coverage spanning from ancient times to the modern era, (2) its diverse range of texts, including materials for direct reading and kun'yomi of Chinese texts, Japaneseized Chinese texts, and Japanese texts, and (3) its ability to compare kanji pronunciations and Sino-Japanese vocabulary. Alongside the data, a bibliographic data file summarizing the specific characteristics of each source and providing individual information about the input has also been made available. This file includes essential information for understanding the kanji pronunciations found in the referenced texts and lists related references. Furthermore, the potential for new research on kanji pronunciations using this database has been presented at academic conferences.

研究分野：日本語学

キーワード：漢字音 漢語音 データベース 位相差 音韻史 字音仮名遣い

1. 研究開始当初の背景

漢字音の輸入と漢語音の定着は、日本語に対して音韻体系の組み換えや音配列の変化など多くの影響を与えてきた。しかし漢字音・漢語音を研究の主体としかつ総体的に捉える視点は、これまで必ずしも十分に育ってこなかった。それは漢字音・漢語音そのものを扱い、かつ研究上運用可能な信頼性の高いデータベース(以下 DB)が存在していないことによると考えられる。本研究では、こうした DB を構築することによって文献の位相を可視化し漢字音から漢語音が形成されるプロセスに光を当て、これまで見過ごされてきた漢字・漢語音韻史の基礎的な学術的課題を再検討し、新たな研究の局面を創出する。

2. 研究の目的

研究の目的は次の3点である。(1) 文献の位相的差と漢字音・漢語音の関係を明らかにする...資料を横断することで文献間の位相差をより大きな視点で捉え、それが漢字音・漢語音とどのような関係を持つかを明らかにする。(2) 漢字音と漢語音の関係を明らかにする...本研究では漢字音と漢語音を対照可能にすることで、漢字音の接続が漢語音を形成するにあたっての基礎的な学術的課題を明らかにする。(3) 漢語の音韻史を明らかにする...例えば、従来平安・鎌倉期の漢字音・漢語音についての体系的な声調情報が得難いばかりに広韻等の韻書に依存することが多かったが、漢文訓読資料に記載された音調等に基づくことができれば、漢語アクセントが形成されるまでの史的段階をより実証的に明らかにすることができる。

3. 研究の方法

(1)漢文直読・訓読資料、和化漢文訓読資料、和文資料、辞書等資料に資料の位相を区分し、それぞれの区分を担当する研究者が原本や影印を用いてすでに本研究代表者および分担者が概ね入力を終えているデータの再確認を行う。その上で本研究に必要な字音注記類を項目ごとに洗い直し、統一的なフォーマットを作成する。また新たな調査によってさらにデータを加える。次に DB の各テーブルを構成する項目を選定し、包摂基準に従って字形や字体の調整を行う。以上を経て DB を完成させる。

(2)DB の検証を兼ねてデータに基づく各分析テーマの研究を進める。「漢語音韻史」では平安・鎌倉期から南北朝時代を経て、近世期までの漢語の変遷を主として声調・アクセントの面で素描する。「位相差と漢字漢語音」では文献の資料的位相と漢字・漢語音の関係と、その史の変遷を整理する。「漢字音と漢語音の関係」では DB によって横断的に閲覧可能となった漢語音と韻書や字書・辞書資料との関係を整理する。

4. 研究成果

(1) データベースの概要

データは 30 文献(漢文直読・訓読資料 12、和化漢文資料 6、辞書音義等 2、和文資料 10)からなる。その内訳は延字数 86875、漢語数 49102、声点数 44577、仮名音注数 70465、反切数 1787、類音注数 434 である。各データは漢字ごとに資料 ID、資料内漢字番号、資料内漢語番号が割り付けてあり、全てのデータを一意に区別することができる。デー

タは Excel 形式及びタブ区切りテキスト (TSV) 形式で <https://www2.mmc.atomi.ac.jp/~katou/KanjionDB/index.html> に公開している。これらのデータとは別に、その元となる各文献の所蔵先、資料の特徴、漢字音の概説、参考文献を付し、利用者の便となるように工夫した (Markdown 形式)。

(2) 含まれる資料 (資料 ID と資料名の形で掲げる)

20-001-01 大般若波羅蜜多經_根津美術館、20-002-01 医心方_半井家旧蔵、20-002-02 医心方_仁和寺、30-005-01 莊子_高山寺_甲、30-005-02 莊子_高山寺_乙、30-006-01 世俗諺文_天理大学図書館、30-008-01 遊仙窟_金剛寺、30-008-02 遊仙窟_醍醐寺、30-010-01 阿弥陀經_西本願寺、30-011-01 浄土論註_西本願寺、30-012-01 群書治要_金沢文庫_経部、30-013-01 尾張国郡司百姓等解文_早稲田大学図書館、30-013-02 尾張国郡司百姓等解文_東京大学史料編纂所、30-013-03 尾張国郡司百姓等解文_真福寺、30-015-01 浄土三經往生文類_西本願寺、30-016-01 新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本、30-016-02 新猿楽記_尊経閣文庫_弘安本、30-017-01 色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本、30-018-01 三帖和讃_専修寺、30-019-01 一念多念文意_東本願寺、30-020-01 尊号眞像銘文_法雲寺_略本、30-020-02 尊号眞像銘文_専修寺_広本、30-021-01 西方指南抄_専修寺、30-022-01 唯信鈔文意_専修寺_正月十一日本、30-022-02 唯信鈔文意_専修寺_正月二十七日日本、30-023-01 唯信鈔_専修寺_平仮名本、30-023-02 唯信抄_西本願寺、30-023-03 唯信鈔_専修寺、40-016-03 新猿楽記_尊経閣文庫_康永本、50-029-01 浄土三部経音義_龍谷大学図書館

(3) 個別的な成果

位相差

漢字音の実現を、日常音から漢籍などの読書音まで位相的な異なりによって捉える試みはすでになされてきている (沼本克明 1986、佐々木勇 2009 など)。本研究によって位相差を量的に捉えることが可能となった。

例えば唇内入声韻尾 (-p) 字は原音における内破音を写し取ったフ表記であったものが、平安後期には両唇摩擦音を経て、所謂八行転呼音によって 1000 年頃を境にウで発音されるようになる。また両唇摩擦音に無声子音が後続する環境では促音化しやすかったと考えられており、それがツ表記で写し取られた事例も文献上に現れることが知られている。本 DB では促音については数が少ないが漢文訓読資料にわずかに目立つ。和文的な資料では八行転呼音を被ったウ表記が目立ち、漢文的な資料では規範的な形を保つほかには促音形が目立つという。本 DB からは、和化漢文資料が和文的な性質を持つことが伺われる。同時期の辞書等資料 (前田家三卷本色葉字類抄) は漢籍資料と和化漢文資料の中間的な性質かと考えられた。

また漢字音の接続において後項が濁音化する、いわゆる連濁現象についても、漢音読訓点資料では連濁が非常に少ないという位相差があったことが知られる。本 DB では和化漢文資料、和文資料 (仏典)、辞書等資料に連濁が多いこと、漢文訓読資料 (漢籍) に連濁が生じにくいことが確かめられる。

最後に、漢音声調における上昇調 + 上昇調 (去声字または全濁上声字の接続)、高平調 + 上昇調 (上声字に後接する去声字または全濁上声字) 環境では、中低形を生じるために後項の音調を高平調または低平調に変化する現象が知られる現象に言及する。本 DB からは、漢文訓読資料 (漢籍) に 去去 が多い一方、漢文訓読資料 (国書)、和化漢文

資料、辞書等資料に「去去」が少ないことが確認された。これは和文脈に近い位相の資料では日本語としての韻律的なまとまりが反映していることによると考えられよう。

字音仮名遣い

字音仮名遣いとは日本漢字音の歴史的仮名遣いのことであり、江戸時代に研究が盛んになった分野である。しかし江戸時代の研究は『韻鏡』の図式に従った演繹的なものであり、架空の音形が設定されるなどの欠陥が存在した。字音仮名遣いとは、古辞書や訓点資料などで実際に用いられた用例に従い、帰納的に確定すべきものであることが、沼本克明(2014)『帰納と演繹とはさまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず』(汲古書院)などで指摘されているところである。本 DB は実際の漢字音・漢語音を収録したものであり、字音仮名遣いの確定に多大な貢献をなし得ることが期待された。

まず本 DB の豊富な用例から、狙い通りに十分な実例が集められたという成果があった。しかし、字音仮名遣いの確定という方面においては、むしろ様々な問題点をあぶり出す結果になったと考えている。漢語音から単独の漢字音を析出する困難さや、「字音仮名遣い」と「古い字音形」とが同一視できない可能性に直面するなど、字音仮名遣いというものの定義・論点を整理する作業が今後必要になるという見通しを得た。従来考えられていた単純な字音仮名遣い研究(像)を脱し、研究が新たな局面に入ったという面で、本研究は大きな学術的意義があったと言える。

外部データへの展開可能性

本データベースは、まず研究分担者が抱えている字音データを共通のプラットフォームに落とし込むことから着手された。しかし今後は漢字音・漢語音研究のより普遍的な形が必要となろう。広韻や中古音の DB は言うまでもないことであるが、類聚名義抄や和名抄などの漢字音研究の重要な資料などとの連携も大きな課題である。シンポジウム「古辞書・漢字音研究と人文情報学」(2022)や研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース 2022」(2023)では、隣接領域である古辞書研究と DB の接続について検討された。

以上は本 DB そのものを漢字音・漢語音研究に資するものとして育てていく場合の視点であるが、逆に本 DB が別の日本語研究に活用されていく視点も検討された。その一つが、国立国語研究「語誌ポータル」への接続である。当該サイトは個別的な語彙の総合的な情報集約を目指すのが、史的な側面としては日本語歴史コーパス(CHJ)に依存するところが大きい。CHJは資料文献的な土台が文学作品であるために、漢語の種類に位相的な偏りがある。一方、本 DB は漢文系資料に主軸を置いているため、その偏りを補完しうる。補完の動きを十全にするためには、本 DB のデータ形式を外部へと接続可能なものへとアレンジする必要があるといったことが検討された。

(4) 本研究が生み出す今後の可能性と課題

本 DB は主として鎌倉期の文献資料を用いる研究分担者によって構築されたために、時代的な偏りが大きくなってしまった。今後は、近世から現代にかけての文献資料に拡張することで、時代的な通覧性を高め、より有用性の高い DB に育てていく予定である。その場合、この DB の設計では対応できない部分がある。これは(3)で述べた外部 DB への接続の議論と同じ問題につながっている。時代的な通覧性と、外部への接続・波及効果を見据えて設計部分で改善を加えていくことが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 佐々木 勇	4. 巻 17
2. 論文標題 「日本語歴史コーパス」修正点報告の提案	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 42～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.17.2_42	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐々木 勇	4. 巻 2
2. 論文標題 北野経王堂一切経（北野社一切経）の底本（三）：高麗再雕版・思溪版以外の底本（2）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要・教育学研究	6. 最初と最後の頁 61～70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51605	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐々木勇	4. 巻 52
2. 論文標題 大東急記念文庫蔵『大般若波羅蜜多經』鎌倉初期写本（第二四函一六五架）の注文（下）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 かがみ	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石山裕慈	4. 巻 148
2. 論文標題 観智院本『世俗諺文』鎌倉初期点字音点分韻表	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 1-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤大鶴	4. 巻 57
2. 論文標題 蜂須賀家旧蔵専修大学図書館蔵『和漢朗詠集』の漢字音	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石山裕慈	4. 巻 146
2. 論文標題 浄土三部経音義の漢字音	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 48-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木勇	4. 巻 1
2. 論文標題 北野経王堂一切経 (北野社一切経) の底本 (二) 高麗再雕版・思溪版以外の底本 (1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木勇	4. 巻 16-3
2. 論文標題 狩谷 斎自筆奥書『倭名類聚抄』京本「又一本」 狩谷家旧蔵国立国会図書館現蔵『和名類聚抄』 (WA18-14)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木勇	4. 巻 146
2. 論文標題 『倭名類聚抄』昌平本の原本	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木勇	4. 巻 14
2. 論文標題 親鸞聖人の漢文訓読	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 浄土真宗総合研究	6. 最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木勇	4. 巻 51
2. 論文標題 大東急記念文庫蔵『大般若波羅蜜多經』鎌倉初期写本 (第二四函一六五架) の注文 (中)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 かがみ	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤大鶴	4. 巻 16
2. 論文標題 「出合」における「去声字に後接する去声字」再考 漢語アクセントの形成という観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アクセント史資料研究会『論集』	6. 最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤大鶴	4. 巻 56
2. 論文標題 国立台湾大学蔵『和漢朗詠集私注』の字音について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤大鶴	4. 巻 15
2. 論文標題 漢音漢語における去声 + 去声の接続および後項の「声調」変化 尊経閣文庫蔵『色葉字類抄』(三巻本)を用いて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アクセント史資料研究会『論集』	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木勇	4. 巻 50
2. 論文標題 大東急記念文庫蔵『大般若波羅蜜多經』鎌倉初期写本(第二四函一六五架)の注文(上)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 かがみ	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木勇	4. 巻 第二部第68号
2. 論文標題 北野経王堂一切経(北野社一切経)の底本(一) 主たる底本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/48503	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤大鶴, 石山裕慈, 佐々木勇, 高田智和
2. 発表標題 「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」の構築と運用可能性
3. 学会等名 日本語学会2021年度春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤大鶴, 石山裕慈, 佐々木勇, 高田智和
2. 発表標題 「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」の設計と発展的な運用について
3. 学会等名 シンポジウム「古辞書・漢字音研究と人文情報学」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤大鶴
2. 発表標題 漢語における去声 + 去声の接続および後項の「声調」変化 色葉字類抄を中心に
3. 学会等名 アクセント史資料研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐々木勇主編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 634
3. 書名 龍谷大学図書館蔵黒谷上人語燈録翻刻および総索引	

〔産業財産権〕

〔その他〕

資料横断的な漢字音・漢語音データベース
<http://www2.mmc.atomi.ac.jp/~katou/KanjionDB/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐々木 勇 (Sasaki Isamu) (50215711)	広島大学・人間社会科学研究所(教)・教授 (15401)	
研究分担者	石山 裕慈 (Ishiyama Yuji) (70552884)	神戸大学・人文学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	高田 智和 (Takada Tomokazu) (90415612)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変化研究領域・教授 (62618)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
中国	清華大学 人文学院 外国語文学系		